NPO日本デザイン協会（JDA）セミナー

「イタリアン・セオリー」から読めること（前編）

2019年2月26日にJIA館にて開催されたセミナーの記録を４回に分けて掲載します。
登壇者：神田順（東大名誉教授）、山本想太郎（日本建築家協会デザイン部会長）、
連健夫（日本建築まちづくり適正支援機構代表理事）、大倉冨美雄（進行）
共催：（公社）日本建築家協会（JIA）関東甲信越支部デザイン部会

NPO日本デザイン協会理事長
元デザイン部会長
大倉冨美雄

言葉や数字の判断を超えた表現領域を誰が保証するのか 才能あるフリーランスを格差社会化から救うには

新型コロナウイルス感染拡大で緊急事態宣言が出たこと、しかも、ここで話題のイタリアがこれほど被害を受けるとは、このセミナー開催時には思いもつかなかった。

「イタリアン・セオリー」という言葉は、英語圏で「フレンチ・セオリー」に代わって台頭してきた、という言い方があったことを捉えて、岡田温司氏（京都大学教授）が著書とした（2014年）概念である。

本セミナーは、それに影響を受けたという神田順氏（元東京大学教授）を招いて、「イタリアン・セオリー」を核に日本の現状を考えようとしたものだ。神田氏は、現行の国の定める建築基準法の上をいく建築基本法（仮）を創ろうと活動されてきた、社会活動家でもある。

ここで言う「イタリア」は、その文化を背景にしつつも、いわゆる観光案内的な話ではない。しかし、観光大国として異人種の受け入れにも寛大な国が、ウイルスの被害をヨーロッパで真っ先に受け、拡散を止められなかった理由を、この国特有の「開放感」のようなものに結び付ける気はないが、どこか深淵での繋がりはありそうだ。

そもそも、「イタリアン・セオリー」という、在伊10年の経験者である私からしても、言葉で表現することが難しい感性的・倫理的な世界観は、単にイタリア人だけのものではなく、人類全体が個人のバランス感覚で判断していく問題に転化していくように思える。

このセミナーのテーマは、このように抽象性もあるため、4人の登壇者のそれぞれの想いや経験から語る内容には、主題の統合への一貫性が無いように感じられるかもしれない。それは「イタリアン・セオリー」が醸し出す問題（前論）と、「日本の規制社会（特に建築界を例に）」問題（後論）との乖離感にも関わるだろう。

前論には、哲学的にナチス時代の戦争体験から尾を引く欧米の思想史に加え、「貧」を讃える宗教上の死生観への想いが加わっており、一概に日本人に体感するのは難しい面も感じられる。岡田教授が言うように、「イタリアン・セオリー」が、それまでの哲学の主流だった「『主体』や『真理』といった観念的で抽象的な問題よりも、生や歴史の、現実的で具体的な問題（個人の自由と規律、権力の対応など）に関心が向けられてきた」という視点が重要になりそうだ。それは、いわゆる近代主義への批判にも通じている。そしてその、「貰った近代主義」の残滓から抜け出せないのが日本（人）なのかもしれない。

「生の現実」で繋がる日本の問題

それを承知で、後論で現代日本の社会問題として、前論の核心を活用すればよいのだろうが、登壇者各人の関心の力点は異なっている。例えば建築法規の認識について、この国の「規制」をあえて造語風に言えば、変えられる〈技術知〉法と見るか、簡単には動かせない〈慣習知〉法に根を持つと見るか、という価値比重の差になっても現れてくるように。それでも、実感としての我々の人生や、その生を助けるための法整備を考える時、「イタリアン・セオリー」のもたらす「生の現実」性や資本主義に欠ける倫理観が、ここで繋がってくるのではないだろうか。

本稿は今回から分割して掲載されるので、先に登壇者の発言を簡単に紹介して、全体の進行を示しておきたい。

はじめに、神田順氏が日本の設計環境に潜む問題（真の専門家軽視）を言及し、そこから「イタリアン・セオリー」を紹介する。次に、山本想太郎氏から社会構造として変えることはできない「選ぶ者」と「選ばれる者」への言及があり、現行の建築基準法はそれほど悪くない、とする立場を示す。3人目の連（むらじ）健夫氏は、イギリスでの経験を含めて、実際に設計環境を変えていく立場として具体例を紹介する。最後にまとめとして、日本に深く根付いた、「上が指示し、下が追従する」体制に順応する現状に至った経過を大倉が語る。

1回のセミナーとしては重く広範であるが、AI指向社会に向かう一方、改めて人間存在の根本を問われる今の時代に、忘れられがちで根源に戻りにくい、この国の設計環境の本質問題が語られている。日本社会全体をも俯瞰する良い参考資料になることを期待したい。

（大倉冨美雄）

FORUM

セミナー

「イタリアン・セオリー」から読めること

神田 順（東京大学大名誉教授）

何でも数値と金で決める、この国の仕組みはおかしい

「イタリアン・セオリー」に出合ったのは、2003年発足の建築基本法制定準備会[注1]で、法律を議論していた時でした。建築基準法というのは基本的に規制法になっていますが、そもそも法律は何のためにあるのか。例えば、24時間、機械換気をすることが最低基準として規定されていますが、法律で高気密・高断熱住宅が義務付けられるとなると、それは人間の生き方を決めることになる。**法律がそういうことを決めるとはどういうことか？**と、**準備会を立ち上げた後ずっと思ってきた**のですが、『イタリアン・セオリー』を読み、現代の国が定める法律の意味がわかった気がしたのです。

セミナータイトルにある「**規制社会と知的生産**」を語っていると「**イタリアン・セオリー**」の話になると思いますので、最初にいくつか具体的に紹介します。

最初は仙田満先生の「知的生産者の公共調達に関わる法整備の動き」の記録です。「**金で判断する設計入札は、何としてもおかしい**」と、**建築学会も提案はしたけれど現実は変わらない。特に、公共建築や公共事業に関しては、会計法があり、なるべく安いものを採用するように国が決めています。**それは建築だけでなく、**いろいろな分野で金銭で決める流れがあり、**これに対して、**学術会議でも「公共調達」として、知的生産者の選定のための法整備を求めてきました。**

これは、**逆に金銭の多寡で判断しないとなると、中身での判断が必要で、それでできるのか**との指摘もされてきました。これには公開・非公開の問題や、行政が選ぶので誰を指名するのか決まっていたりすると金銭の多寡よりも別の問題が出てくるのですが、こういう動きがあるということ。これはまさに規制社会と知的生産の話で、**社会的な仕組みとしてはうまくいっていない**例です。

次に「建築基準法における法規制の問題」ですが、構造を専門とする自分の意識としては、**建物の安全性については、専門家が自分の知識と知恵で評価すべきであって、法律にどのくらい適合しているか等では判断できないと思っていました。**しかし、それまでの（旧）法規は、最低基準を謳っておきながら「構造物は雪、風、地震に対して安全でなければならない。それは構造計算で確かめることが出来る」というのが主文だったのが、1998年

セミナーの様子

の基準法改正は、性能規定化という言葉に沿うものの、**性能自体を専門家に委ねるのでなく、「国の定める計算方法、決めた基準で確かめたものを安全と見なす」となった**のです。逆に言うと、**国が認めた基準で計算しないものは安全と見なさない**というわけです。あまりにもおかしいのですが、多くの専門家が声を上げても、法律は変わらないのが現状です。

構造家として、**単体規定のところで質をどうするのか、言葉、式ですべてを規定するのは無理だと思っています。集団規定の方は、規制側が何を狙うといえば、自由主義経済の中での規制緩和、つまり経済の活性化です。**いちばん便利なものとして容積率を大きくする流れがあり、これにより街の景観ががた落ちしている現状があるのです。

こういう中で建築の専門家が、将来の建築の望ましいあり方について発言をしても、容積率が800%や1000%になるというところでは非常に無力になる。これは経済原理の横暴でしょうが、**こういう中で建築家は、経済原理に迎合するのでなく、法律を変えることで本来の活動ができるようにしていかなければならない**と思います。

巨大企業支援の体制がもたらす社会のゆがみ

岡田温司さんの書いた『イタリアン・セオリー』について私なりに解説させていただきます。

『イタリアン・セオリー』で扱う、ネグリ、アガンベン、エスポジト[注2]は、80代、70代、60代と10歳くらいずつ年齢差のあるイタリアの哲学者です。それぞれの時代背景のもとで自分の思考を整理して哲学ができている人たちだと思いますし、活躍の場もイタリア国内だけでなく、アメリカでもあり、それらの視点から彼らが新しい哲学の場を開いています。

特に今の資本主義、市場経済の中で社会が動いていることに関しては、まずネグリが書いた『帝国』で、我々が一般に考えていた帝国主義のこととは少し違い、もっと広い視野を描いています。**市場経済の中で、巨大企業には実に巧妙に各原理が応用され、動いてきている。**特に戦後、グローバルなスケールになってきており、**小さ**

（注1）建築基本法の制定を目指し、任意団体として発足。4月に『持続可能社会と地域創生のための建築基本法制定』（A-Forum出版）を発刊。
（注2）彼らは必ずしもイタリア在住者とは限らない。発表年代による時代感覚の差はわずかでも、ここに至るまでの時代背景は意識しておく必要がある。例えば、ネグリの『帝国』初版本発刊は1995年（平成7年。阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件のあった年）。

「イタリアン・セオリー」が扱う3人のイタリア人思想家・哲学者と、そのキーワード

アントニオ・ネグリ	『帝国』2003年 （マルチチュード、生政治（1）、グローバル市場経済）
ジョルジョ・アガンベン	『ホモ・サケル』2007年 （生政治（2）、宗教の世俗化・法の押しつけ）
ロベルト・エスポジト	『近代政治の脱構築』2009年 （生政治（3））

※生政治は、3人が違った意識で問題にしている。

な企業は太刀打ちできない状態なのですが、それを上手く扱っています。

つまり、**微妙に独占を許しながら大きくしていく仕組みがあって、お金を増やしていくことが巧妙になってきている。**直接、国が戦争で侵略しなくても、国と国の経済競争に企業が関わってきたり、巨大企業を国が保護するなど、経済的に侵略できてしまう。**経済活性化は誰でも評価するが、格差は拡大していく。独占禁止法がありながら、国は自ら例外を作って微妙に独占を許していく。**お金の扱い方、法律のルールがなかなか巧妙になってきているのです。最近では中国のアフリカ進出の例もあります。**『帝国』は、このことをうまく書いています。**

市場経済が、すなわち「宗教」である

ファーガソンの『文明』でも、プロテスタントの勤勉さがアメリカ合衆国をつくり、資本、科学、医学が結びついて発展し、現在まで続いているとしています。フランスにもデリダやフーコーがいて、それらを踏まえてイタリアの哲学者たちは語っていると思いました。

岡田さんが中心に挙げているのがアガンベンの『ホモ・サケル』で、その意味は「聖なる人」で、「魔女」をキーワードとして使っています。「魔女」には、人を殺しても死刑にならないが、人間としては見なされないという概念があり、現代の宗教活動もこれに例えています。

宗教改革時には、カトリックの腐敗をプロテスタントが解放し、日本でも明治になって神仏統合令などが進みました。それまで宗教が人の支えとなってきたのはわかりますが、**現在は宗教も市場経済の中でなければ生き残れません。市場に歯向かうものは、例えばどんなに優れた芸術家でも滅ぼされるし、あるいはどこかに隠れてしか仕事ができない。それに乗じて、「市場経済が宗教に」なってしまっているのです。そのことをアガンベンは書いています。宗教に対して「違う」、「経済活性化に対して違う」と言うと「お前は異端者だ」となるのです。**

法律や体制が生き方を決めている

エスポジトの『近代政治の脱構築』も難しいのですが、**「法律が生き方を決めている。それでいいのだろうか」**という問題を投げかけています。

日本は第二次世界大戦をきちんと乗り越えていないところがあるのですが、**ドイツはナチスの存在を大きな失敗として学習し深く反省し、その後の社会の形成を考えてきました。それが「イタリアン・セオリー」に引き継がれています。ここに見えるいろいろな見方が、社会の「ゆがみ」や「矛盾点」を解決するきっかけとなり、「イタリアン・セオリーから学ぶもの」という今回のテーマに繋がればと思っています。**

ネグリは東日本大震災の後、日本に来て講演したのですが、「あれだけの事故があって、まだ原発をやるの？」と言っているのです。きちんと考えることが必要なんだと思いました。日本はあれだけの事故があったのに、何も考えていないように思います。

アガンベンのところで「宗教の世俗化」の話をしましたが、ネグリのところでは「マルチチュード」という言葉がよく出てきます。マルクス主義としての中国、ソ連の時代は**人民と資本家との対比だったので、人々を一括りにしてしまっていましたが、「マルチチュード」は人と人の集合体のことで、そこに人の生活や生き方がある。それが大事ですし、どうやって政治がそれを運営できるかだと思います。**現実にはグローバルな市場経済がお金の世界では力を持っていて、大きく廻している中で、問題はどうしたら人が気持ちよく生活できるかだと思うのです。

「合意形成による力」と、「既成権力の無理な押しつけ」[注3]

アガンベンの『ホモ・サケル』を読んだのですが、ポイントは、constituting powerとconstituted powerの対比です。Constitutionは「憲法」のことですが、**constituting powerは、仕組みや法律はこうあるべきと提案することであり**（編注：つまり「合意形成による力」）、**専門家が専門の分野でどう社会や制度を良くしようかと力を出し合って助けていくこと**です。

constituted powerは、国や自治体は憲法や法律の枠内で権力が与えられているわけですから、人々は、権力側から規制を受けることを言います（編注：つまり「既成権力の無理な押しつけ」）。

しかし、いつまでも与えられ、そこにばかり権力が集まるだけでは、本来の社会の仕組みや価値基準が、人々のためというより、わかりやすい市場価値や貨幣価値に流れやすい。価値を評価できる人がきちんと評価しないと、ますます価値は認められないと思います。

（次号に続く）

（注3）個人の生き方を限定する法律や体制が進む中、どうしたら個人を活かし、一方の規制権力をコントロールできるかという課題が大きくなる。宗教の世俗化を語るアガンベンだが、そこに生じた宗教の締め付けが、転じて市場経済の活性化がもたらす締め付け（＝既成権力）に変わったと受け取られ、それを形成する法規制への疑問を投げかける。